

リング・チャケット専務取締役 緒方克之さんが辻洋装店さんを訪問 パターン・裁断は服作りの入り口。 CAMの導入で、後工程でおこる問題を未然に解決する

リング・チャケット さん × 辻 さん

前回、辻洋装店・辻社長が訪問されたリング・チャケットの専務・緒方克之さんが、裁断機の導入を計画されているとのこと。ぜひ裁断工程を拝見したいと、今回は逆に緒方さんが辻洋装店さんを訪問された。

訪問者—リング・チャケット専務取締役 緒方克之 さん

訪問先—辻洋装店

社長 辻 庸介 さん

統括部長 里平玲子 さん

裁断部 主任 辻 吉樹 さん

自社にあわせて最適なシステムを組む

「前回もお話しましたが、当社も裁断機の導入を検討しているのですが、住宅街にあるために道路も工場も狭いので躊躇していたのです。同じような条件で入れられたとのこと、ぜひ拝見したいとうかがいました」（緒方さん）。

辻洋装店は、プレタの婦人服作りでは知られた工場である。辻洋装店が裁断機を導入したのは5年前。都内の住宅街にある工場とあって道も狭いし工場も手狭である。

「CAMメーカーをすべて回り、条件に合致する裁断機を探しました。それでも玄関を改造して長さ5メートルを確保。やっと延反機と裁断機を入れることができました」と辻さん。「大きさは、問題はバキューム装置部分です。中に空気を引くファンが入ったプールが入らないと導入できません。結局、工場に入るサイズということで、小型の裁断機を入れました」（辻社長）。

辻さんでは、スペースの関係でピックアップゾーンの短い機種を導入されている。これは同社の生産量にあわせたサイズでもある。

「当社では、延反、裁断、ピックアップを1人が作業し

ていて、それでちょうど後工程とうまく同期化しています。これが当社のサイクルにあったシステムなのです。ピックアップゾーンを大きくすれば効率的かもしれませんが、後工程との同期化を考えると一度にたくさんピックアップできても意味がないんです」（辻吉樹さん）。

延反機を入れたことで、一人でピックアップをしながら、CAMを動かし、延反機を動かすことが出来るようになっている。それが日産約90枚にあった仕組みなのである。

裁断は服作りの入り口 仕組みで品質・生産性を保証する

同社では、仕事があると、まず里平さんとCAD担当、CAM担当（辻吉樹さん）の3人で、どのような作り方をするか、徹底的に打ち合わせするという。

「デザインが毎型違いますから、最初に工業用パターンを作るときに、私とCAD担当とCAM担当が長い時間をかけて“これはどういう方向でいくか”打合せをします。芯の仕様、貼り方をどうするか、CAMを使うか、バンドナイフか、どこで接着するか……それによって、芯の形も変わってきます。CADでマーキングするときも、早くきれいにやるにはCAMをなるべく使おうと考える。それを踏まえてCAD担当が作業をしますが、それによってマーキングの仕方から、パターンの作り方、芯の作り方、貼り方……が決まる。パターンがいいと裁断がうまくいき、縫製が楽になり、クオリティも良い服が出来る。

コストを考えると、裁断は大きなウェイトを占めています。服作りの大本ですね」とモデリストの里平さん。

「前段階で全体の8割が決まります。しかも裁断もCAD担当も、ただ切っているだけではなく、縫えてパターンのことも良く分かっている人たちです」と吉樹さんもうなづく。

「工場で作業をしているのは若い女の子です。去年は68万円の服を作りました。20~30万円の服はざらです。いったい若い子にそんな技術レベルがあるのか?といわれます。一人一人はそんなに力はないのですが、トータルで見たら、良いパターンを作り、良い指導者がいて、全体をわかってパートを担当することで、コストとクオリティをきちんと管理できるのです」(辻社長)。

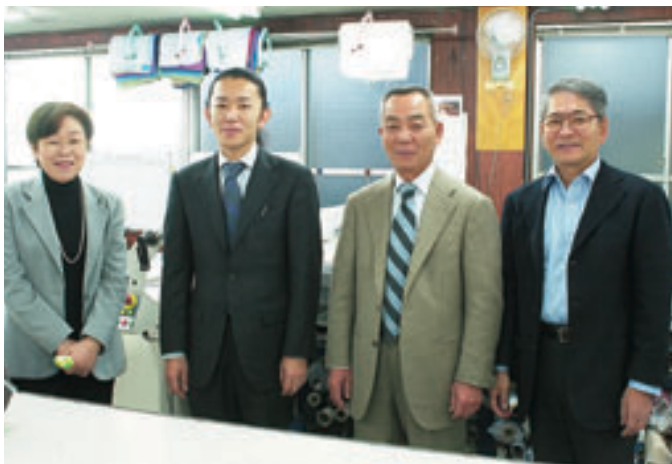
問題をできるだけ前工程で解決する 技術と感性に誇りを持って

「おっしゃるように、パターン・裁断が縫製の入り口なんです。我々も裁断がネックで、いまは人海戦術でやっていますので重ねると、切り躰を入れてもどうしても上と下では若干ズレが出てくる。現場にハサミを持たせたらアカンのですが(笑い)、ウチの基礎自体が、もともと逃いで、“現場で切る”やり方で、それをまだ引き

ずっているんですね。逃いは手仕事です場合は、どうしても仕事が終わるへ後ろへと行くんですね。粗裁ちで仮縫いして、ほどいて、現場で寸法を合わせていく、表に合わせて裏を裁っていく.....という手法なんですね。それを、全部前に持ってこないといカンのです。一工程ずつでも前に.....。我々もかなり前に持ってきましたが、裁断がネックでどうしても現場で裁ち揃えないといカンものも出てきて、後ろに行きがちなんですね。いま70点の状態としてそれがCAD、CAMを入れることで80点、85点になったら御の字やと思うんです」(緒方さん)。

「服作りは技術も才能も必要で、フリーターができる仕事ではない。誇りを持っていい仕事の割には世の中に認められていないです。この現状を打破するには、「自分たちでパターンから服を作り、お客様に着ていただいて、反応を直接に知るオーダー・ショップを展開するのが一番」(里平さん)と辻洋装店の3人は口をそろえる。販売の先駆者が、リング・チャケットさんである。

「自分らで責任を持ってやるしかないんですね。自分らを励まして向上させていくしかない。これからまだ自分たちを高めていくためにいろんな切り口を試し.....それで世間に認められていかないとイカンな.....と思っています。」とおっしゃる緒方さん。皆さん同様の思いのようであった。



左から里平玲子部長、辻吉樹主任、緒方克之専務、辻庸介社長



裁断機を熱心に見る緒方さんと辻社長の話が弾む。



アトリエ縫製ライン



切り躰のマークには天井のレーザーを使い下から糸が出てくる面白い工夫だ



狭い裁断スペースを有効に活用するため、延反台を浮かして、隣の延反台からスライドさせて生地を移動できるように工夫されている。